

## <エッセイ>共同研究のことなど

著者	末木 文美士
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	100-105
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006698">http://doi.org/10.15055/00006698</a>

## <エッセイ>共同研究のことなど

著者	末木 文美士
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	100-105
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006698">http://doi.org/10.15055/00006698</a>

## 共同研究のことなど

末 木 文美士

二〇一五年三月に退職した。その後すぐに家の近くの大学図書館を使いたいと思って出向いたら、入り口のところではシャットアウトされ、この図書館は研究者のためのものなので、一般の方は入れません、と拒否されてしまった。一匹狼という性格がいいが、組織を外れるというのはこういうことかと、大いにショックを受けた。その後、その大学で主催している市民講座の会員になれば図書館が利用できると聞き、さっそく手続きをして事なきを得た。日文研は有難いことに名誉教授にも優しくしてくださるので、大いに甘えて相変わらず出没して、図書館などを利用して頂いている。

それはともかく、この度、日文研が創立三〇周年を迎えたことは、まことにおめでたい。昨年は、小松和彦所長が文化功労者の榮譽に輝き、井上章一教授の『京都ぎらい』がベストセラーになるなど、日文研も一気に全国区に躍り出た感じだ。井上さんの名前は日本中の津々浦々で語られ、講演に行くとも必ず懇親会で名前が出る。元同僚というだけで僕まで持ち上げられて、まるでタレントの元同級生みたいに鼻が高い気がする（文化功労者のほうはそれほどポピュラーではないようだ）。

二〇〇九年に日文研に赴任して六年間在籍したが、それまでいた大学という場との違いに困惑した。大学は学生優先なので、実質的な個人研究費はほとんどなく、科研ですべて賄わなけ

ればならなかったし、事務は本当に事務手続きのためだけで、それも人員削減で、学生の生活上の世話までも研究室の教授に押し付けられていた。日文研は研究組織ということを表示板にしているので、個人研究費をきちんと使うことができ、事務のサポートがしっかりして、研究に専念できた。

国際研究集会の際の研究協力課の手際よさには、外国人のみならず、日本の大学関係者も皆舌を巻いている。大学では、事務的なことも含めて教授の責任ですべて行なわなければならぬので、院生クラスを総動員して、よれよれになりながら、やっと何とか実現するというのが常であった。研究所の雰囲気も落ち着いていて、居心地がよい。イギリスのカレッジ制度に倣うものであるが、木セミ、イブセミ、日文研セミナーなど、外国人を含めて、異分野の研究者の方と自由に討論できる場があるのも嬉しかった。国際性と学際性というスローガンは、単なる外向けの恰好づけではなく、実際に有効に機能している。

そんな雰囲気の中で、僕の研究も大きく広がった。それまで、大学では専門知識を教授し、後継者を育成するということが最大の任務であったから、なかなかその専門の枠から出にくかった。多少越境的な仕事をする、本業を疎かにしているかのように、冷たい目で見られた。日文研は越境が当たり前で、というよりはそもそも境界そのものがないようなものだから、自由にしたがった研究ができた。『近世の仏教』（吉川弘文館、二〇一〇）、『哲学の現場』（トランスビュー、二〇一一）などは、日文研にいたから書けた本である。そんなわけで、日文研にはとても感謝している。人文系の研究状況が急速に悪化する中で、学問の理想の灯を掲げる最後の砦と言ってもよい。

もっともその日文研にしても、今日、次第に追い詰められて、のんびりしていられなくなり

つつあるようだ。僕が辞めた頃から、現役の先生たちがやたらと忙しくなって、落ち着かない様子だ。人間文化研究機構という実態不明の組織の下部組織として、いろいろな圧力がかかり、「唯我独尊」が通用しなくなっているのであろう。「普通の国」ならぬ「普通の施設」になりつつあるような、いやな予感がしないでもない。大学に二三年身を置いて、「象牙の塔」が「普通の職場」に変わる様子を目の当たりにしてきた身からすると、同じことが時差をおいてここでも起こってきているような、そんなデジャビュにとらわれる。とはいえ、組織から外れた人間が、評論家的に行く先を憂えても仕方ないことだ。三〇周年を機に、現役の先生方の意欲的な活動によって、必ずや新しいユニークな日文研が育っていくものと信じている。

\*

日文研の研究活動のいちばんの中核は、何といっても共同研究である。以下、僕自身が主宰した共同研究について、少し裏話を含めて記して、責を塞ぐことにしたい。在任中、僕は共同研究を二回組織した。二〇〇八―一一年の「仏教から見た前近代と近代」、ならびに二〇一三―一四年度の「日本仏教の比較思想的研究」である。

前者は赴任前年から始まっている。これは、もともとは二〇〇七年中に人事が通っていたのであるが、前任校の関係で赴任が一年遅れたため、共同研究だけ先行させたからである。そのために、幹事の磯前順一先生には随分と細かいところまで気を遣って頂いた。様子が分からなないので、共同研究の標準に従って、年に五回研究会を開催し、各回は一日で終わらせることにした。そのために朝から夕方までびっしりと詰め込み、懇親会まで含めると、相当ハードなスケジュールとなった。試行錯誤の結果、午前は『妙貞問答』のテキスト研究、午後は近代仏教を中心とした発表を二本というスタイルができあがった。

日文研の共同研究は、モデルとなった京大人文研と差異化を図るために、テキスト研究はあまり重視しない発表形式が中心のようである。しかし、もともと僕は文献学者であるから、テキストに即した研究は外せないと考えて、『妙貞問答』を選んだ。隔月の研究会では、細かく本文を読み込むことはできなかったが、それでも分担して読解を進め、『妙貞問答を読む』（法藏館、二〇一四）に巻上の本文研究を含めた成果を出版することができた。それと同時に、それが刺激となって、ブリーン教授らによる『妙貞問答』の英訳 *The Myōtei Dialogues*, Brill, 2015 も完成出版されたのは嬉しいことであった。

午後の部は趣きを変えて、僕だけでは研究をカバーしきれないので、磯前氏、林淳氏（愛知学院大学）、吉永進一氏（舞鶴高専）、大谷栄一氏（佛教大学）と私とで運営委員会を作り、相談しながら、テーマやゲストを決めるという方法を取った。近代仏教の研究は今日もっとも進展の著しい領域であり、僕の知らない新しい研究も少なくない。この方式は非常に有効で、僕自身もいろいろと目を見開かされ、勉強になった。

午後の部に関してもうひとつ重要なことは、それをベースに二〇一四年一〇月に国際研究会「近代と仏教」を開いたことである。その時招待した海外のゲストの選定や交渉は、運営委員にお任せしたので、ミシガン大学の大御所ドナルド・ロペス教授はじめ、僕が直接面識のない方ばかりをお呼びすることになった。そのためにゲストの著作を事前に読み合わせるなど、予習が大変だったが、これもまた、僕にとっては未知の領域を勉強することができて、とても有難かった。その成果は、日文研の黒表紙の報告書『近代と仏教』に日本語版を収めると同時に、英語版を *Eastern Buddhist*, NS43-1&2, 2012 に Feature: Modernity and Buddhism とし、林淳氏の編集で収録することができた。さらに、その成果をもとに、構想を改めて日文研叢書と

して『ブツダの変貌』（法藏館、二〇一四）を出版した。

在任期間が短いことが分かっていたので、この一回目の共同研究はかなり頑張って、いわば一度の共同研究で、二つ分やっくらいの成果を上げた。しかし、さすがにそれは頑張りすぎで、継続はできない。途中一年休んで、二回目の共同研究は、在任期間の関係で二年間だけになったこともあって、あまり気負わずに、無理に成果を期待せずに、自由にすることにした。ただ、メンバーをほぼ総入れ替えして、哲学的な分野の方に多く加わっていたいたので、それはそれで楽しく、勉強になった。二年目には国際研究集会「比較思想から見た日本仏教」（二〇一五年二月）も行った。

さすがに、報告書は年度内には間に合わなかったが、二〇一五年一二月に『比較思想から見た日本仏教』を山喜房仏書林から出版した。山喜房は東京本郷の東大正門前の仏教書専門書店で、出版も行なっている。東大在職中に大変お世話になったこともあり、以前からここから出版したいと考えていた。ただ、完全原稿をPDFで提出して、そのまま印刷にかける方式なので、編集作業もすべて自分で手作業で行なわなければならなかった。それはそれで楽しかったが、後で見ると、一部形式が異なっているところもあって、ご愛敬である。

そんなわけで、僕としては楽しく共同研究を行なったが、ただそれを何回も繰り返すことになる、少々マンネリ化しそうな感じもある。毎年分厚い共同研究の成果が続々と出版されるのは壮観ではあるが、たちまち狭い書棚に並べるスペースがなくなってしまう。今後、電子出版などの方法を積極的に採用することも考える必要があるだろう。

退職後、他の先生方の共同研究に加えていただき、研究会に出てみると、それぞれ個性があって、なるほどこういうやり方もあったかと、納得するところも多い。共同研究は大学院生

やオーバードクターの若手の勉強の場という意味も大きく、どの共同研究もそれぞれの方法でその点に意を用いているのは、心強い。予算的な問題もいろいろあるようだが、やはり共同研究は日文研の柱である。それぞれの先生の工夫を生かした活発な活動と大きな成果を期待したい。

(国際日本文化研究センター名誉教授)